

## 演習 I

### 女子大生における母親との親密度と自己成長の関連性

1 班 A07CB002 A07CB015 A07CB043

A07CB050 A07CB059 A07CB064

A07CB109

#### I. 問題

現代の子どもと母親の関係は、昔に比べて大きく変化してきているように思われる。まるで友達のように仲の良い親子をよく見かけるようになり、それがメディアに取り上げられることも増えてきた。友達同士のように仲が良く、お互いに依存した母娘の関係を信田(1997)は「一卵性母娘」と言う。信田(1997)は一卵性母娘の特徴について、①一緒に出かけることが多い(デパート、旅行、食事、観劇、習い事など)、②母親がスポンサー、③服やアクセサリーなどの共有、④実家に帰る娘と歓迎する母親、⑤娘を産んでよかったと思う母親、⑥母親を「かわいい」と言う娘、⑦母娘ともに専業主婦にはドライ、⑧母親のパワーが娘のパワーを上回ると述べている。

上記のように、現代の母と娘の関係は、仲が良いだけでなく母親が娘に依存し娘が母親にべったり甘えてしまうという傾向がみられる。そのことから「自分ひとりでは何もできない」と口にする子どもを増やしているのではないかと考える。柏木・高橋(2003)は、中学生から大学生に至るまで、明らかに娘のほうが息子より母との依存・絆意識が強く、しかも、娘は母との依存・絆意識を次第に強めていくと述べている。

また、西川(2003)は、親への依存や友人への道具的な依存の表出は抑制の側面に比べると状況依存的で、状況的要因によって、影響されやすいことが示唆されると述べている。例えば親と同居している方が、別居に比べて依存度は高いのではないだろうか。心理的な依存のみならずパラサイト・シングルのような、基礎的(社会的)な生活まで親に依存してしまっている現象は少なくない。基礎的(社会的)といっても種類は様々だが、親のお金で生活する経済面での依存や、家事・洗濯など最低限の生活行動も親に頼るといふ寝食での依存などが考えられる。

そこで、女子大生における母親との親密度を調査し、さらに自己成長との関連性から見えてくることは何があるのだろうかと思い、本研究を始めることにした。

#### II. 目的

女子大生における母親との親密度と自己成長の関連性について調べるために、「女子大生における母親との親密度」尺度を作成し、同時に自己成長尺度(梶田 1975)を用いる。自分たちで作成した尺度と既存尺度との間にどんな関連性があるのかを調査することも目的の 1

つとする。

### III. 仮説

女子大生における母親との親密度が高いほど、自己成長尺度が低いという仮説を立てた。

### IV. 方法

#### 1. 調査材料

##### ①女子大生における母親との親密度尺度

新たに「女子大生における母親との親密度」尺度を作成した。これは、女子大生 7 名の自由記述を元に作成したものである。私たちは「女子大生における母親との親密度」を「現代の女子大生が母親に対して友達と同じように接し仲良くしている反面で、社会的、心理的には母親に依存している状態」と捉えた。下位尺度は、友人的触れ合い・社会的依存・心理的依存の 3 つを想定した。これらの項目を 5 件法により全部で 31 項目質問した。

##### ②自己成長尺度

同時に自己成長尺度(梶田 1975)を用い、その関連性についても調査した。自己成長尺度(梶田 1975)は、自らの望むところに向かって自分を成長させようという自己形成的な意識を測定する尺度であり、「あてはまる」～「あてはまらない」の 5 件法である。

#### 2. 調査対象者および調査時期

愛知県内の私立大学の女子大学生 77 名を対象に、質問紙を配布し、有効回答数は 72 名であった。平均年齢は、20.7 歳(SD 1.26)であった。調査は 2009 年 11 月 19 日に行った。

#### 3. 手続き

各尺度からなる質問紙を「親子関係論Ⅱ」を受講している女子大生を対象に、講義時間中に配布し、集団法にて実施した。

### V. 結果

#### 1. 女子大生における母親との親密度尺度の分析

まず、女子大生における母親との親密度尺度 31 項目の平均値、標準偏差を算出した。天井効果のみられた項目はなく、フロア効果の見られた項目は「毎朝、母親に起こしてもらおう」、「母親からお小遣いをもらっている」、「母親と手を繋いだり、腕を組んだりする」、「母親とおそろいの物を持つ」、「母親を一人の人間として尊敬している」、「母親に恋愛の相談をする」、「母親に部屋の掃除をしてもらう」、「母親のことを下の名前やあだ名で呼んでいる」の 8 項目であった。これらの項目を以降の分析から除外した。

次に、残りの 23 項目に対して、主因子法・Promax 回転による因子分析を行った。固有値の変化は 5.99、2.15、1.97、1.48、1.42、…というものであり、3 因子構造が妥当である

と考えられた。また、十分な因子負荷量を示さなかった「母は私の一番の理解者だ」、「母親に敬語を使う」、「母親がいないと心細いと感じる」、「母親に送り迎えをしてもらう」、「母親は私の全てを知っていると思う」、「母親がいなくなったら、生活していけないと感じる」の6項目を分析から除外し、再度主因子法・Promax回転による因子分析を行った。Promax回転後の最終的な因子パターンをTable1に示す。なお、3因子の累積寄与率は、48.61%であった。

Table1 女子大生における母親との親密度尺度の因子分析結果

項目内容	I	II	III
美容やダイエットについて母親と情報交換し合う。	<b>.835</b>	-.097	-.080
母親と服やアクセサリの貸し借りをする。	<b>.705</b>	-.131	.094
記念日や誕生日に母親に何かをプレゼントしたり、買ってあげたりする。	<b>.565</b>	-.044	-.283
母親と共通の趣味がある。	<b>.542</b>	.005	-.071
母親と他愛のないメールをする。	<b>.466</b>	.060	.242
母親には何でも話せる。	<b>.440</b>	.189	.256
*母親に甘えすぎないようにしている。	-.022	<b>.723</b>	-.136
*母親と一緒にいると気がつかう。	.014	<b>.644</b>	.027
*母親に頼らず、自分のことは自分でやるようにしている。	-.122	<b>.592</b>	.034
いつでも母親に甘えることができると思う。	.021	<b>.582</b>	.124
*母親にはいえないことがあり、距離を置いてしまう。	.352	<b>.530</b>	-.139
*母親から自立した人間でありたいと思う。	.033	<b>.503</b>	-.099
*一日母親と顔を合わせないことが多い。(削除項目)	-.295	<b>.380</b>	.091
身の回りのものを母親に買いにいてもらう。	-.132	.015	<b>.646</b>
母親と不満や愚痴を言い合う。	-.133	.109	<b>.571</b>
母親と一緒に出かけることが多い。	.288	-.012	<b>.537</b>
母親の意見に従うことが多い。	-.047	-.193	<b>.532</b>

\*逆転項目

第1因子は6項目で構成されており、「美容やダイエットについて母親と情報交換し合う」、「母親と服やアクセサリの貸し借りをする」、「母親と他愛のないメールをする」など、気軽に友人のように会話や行動で情報交換をする内容の項目が高い負荷量を示していた。これらの項目は、「友人的触れ合い」尺度として想定していた項目とほぼ同じであるため、そのまま「友人的触れ合い」因子とした。

第2因子は7項目で構成されており、「母親に甘えすぎないようにしている」、「母親に頼らず、自分のことは自分でやるようにしている」、「母親から自立した人間でありたいと思う」など、母親から自立しようとする項目が高い負荷量を示していた。これらは逆転項目として用意したものである。また、「心理的依存」尺度と想定していた項目内容とほぼ同じであるため、そのまま「心理的依存」因子とした。

第3因子は4項目で構成されており、「母親と不満や愚痴を言い合う」、「母親の意見に従うことが多い」など、物理的にも心理的にも母親と密着した関係であることを表す項目が高い負荷量を示していた。そこで「密着」因子と命名した。

## 2. 女子大生における母親との親密度尺度の総得点および下位尺度間の関連

女子大生における母親との親密度尺度の総得点の平均値、標準偏差を算出したところ、51.79(SD 10.48)であった。

次に、女子大生における母親との親密度尺度の3つの下位尺度に相当する項目の平均値を算出し、「友人的触れ合い」下位尺度得点(平均 3.22、SD 0.98)、「心理的依存」下位尺度得点(平均 3.25、SD 0.78)、「密着」下位尺度得点(平均 3.24、SD 0.82)とした。内的整合性を検討するために各下位尺度の $\alpha$ 係数を算出したところ、「友人的触れ合い」で $\alpha = .76$ 、「心理的依存」で $\alpha = .78$ であり、十分な値が得られた。また、「密着」では $\alpha = .63$ と十分な値は得られなかったが、項目が少ないためだと考えられる。

女子大生における母親との親密度尺度の総得点および下位尺度間相関を Table2 に示す。

Table2 女子大生における母親との親密度尺度の総得点および下位尺度間の相関係数,平均,SD, $\alpha$ 係数

	総得点	友人的触れ合い	心理的依存	密着	平均	SD	$\alpha$
総得点	—	.86**	.75**	.58**	51.79	10.48	.81
友人的触れ合い		—	.44**	.34**	3.22	0.98	.76
心理的依存			—	.18	3.25	0.78	.78
密着				—	3.24	0.82	.63

\*\* $p < .01$

### 3. 自己成長尺度の分析

次に、自己成長尺度 31 項目の平均値、標準偏差を算出したところ、96.04(SD 11.71)であった。 $\alpha$ 係数を算出したところ、0.77 であった。

### 4. 女子大生における母親との親密度尺度と自己成長尺度の関連

女子大生における母親との親密度尺度の総得点および3つの下位尺度と、自己成長尺度の相関係数を算出した。その結果、総得点との間では $r = .13$ 、「友人的触れ合い」との間では $r = .17$ 、「心理的依存」との間では $r = .12$ 、「密着」との間では $r = -.07$ であり、女子大生における母親との親密度尺度と自己成長尺度に相関はみられなかった。

女子大生における母親との親密度尺度の総得点および各下位尺度と自己成長尺度の相関係数を Table3 に示す。

Table3 女子大生における母親との親密度の総得点および3つの下位尺度と自己成長尺度の相関係数

	総得点	友人的触れ合い	心理的依存	密着
自己成長	.13	.17	.12	-.07

\*\* $p < .01$

## VI. 考察

### 1. 女子大生における母親との親密度尺度

まず、今回作成した尺度の各項目について平均値と標準偏差を算出した結果、「母親と手

を繋いだり、腕を組んだりする」、「母親のことを下の名前やあだ名で呼んでいる」、「母親とおそろいの物を持つ」、「母親に恋愛の相談をする」、「毎朝、母親に起こしてもらう」、「母親からお小遣いをもらっている」、「母親に部屋の掃除をしてもらう」、「母親を一人の人間として尊敬している」の8項目でフロア効果がみられた。「母親を一人の人間として尊敬している」という項目は、女子大生は自分が親になるという経験をしていない者がほとんどであり、まだ親の気持ちを十分には理解出来ないため、平均値が低くなりフロア効果がみられたと考えられる。また、「毎朝、母親に起こしてもらう」、「母親に部屋の掃除をもらう」、「母親からお小遣いをもらっている」という項目は極端な依存関係であったり限定的な表現であったため、フロア効果がみられたのではないかと考えられる。また、今回の調査対象者は、想定していたよりも社会的依存をしていない傾向があると考えられる。「母親と手を繋いだり、腕を組んだりする」、「母親とおそろいの物を持つ」は、友人同士でも小中高生のような密着した関係であるため、女子大生に対しての質問項目としては適切でなかったと考えられる。「母親のことを下の名前やあだ名で呼んでいる」、「母親に恋愛の相談をする」は標準偏差が大きく、個人差があったため、フロア効果がみられたと考えられる。

次に、フロア効果のみられた項目を除いた23項目に対して因子分析を行った。その結果、十分な因子負荷量を示さなかった「母は私の一番の理解者だ」、「母親に敬語を使う」、「母親がいないと心細いと感じる」、「母親に送り迎えをしてもらう」、「母親は私の全てを知っていると思う」、「母親がいなくなったら、生活していけないと感じる」の6項目を以降の分析から除外した。これらの項目には、最初に「社会的依存」尺度として想定していたものが多く含まれていた。今回の調査対象者は、行動では親密な関係がみられるが、社会的にはあまり依存していないのではないかと考えられる。

そして、最終的な因子分析の結果、3因子構造がみられ、それぞれ「友人的触れ合い」、「心理的依存」、「密着」と命名した。「友人的触れ合い」因子については、あらかじめ想定していた下位尺度が支持されたと言えるだろう。また、「心理的依存」因子も、あらかじめ想定していた下位尺度が支持されたと言えるだろう。「密着」因子については想定していなかったが、これらの項目は心理的にも物理的にも母子が密着しており、女子大生における母親との親密度を測るために必要な因子であると考えられる。

また、内的整合性を検討する $\alpha$ 係数は「友人的触れ合い」因子と「心理的依存」因子では十分な値が得られた。「密着」因子については、十分な値は得られなかった。これは、項目数が少ないことが影響していると考えられる。

## 2. 女子大生における母親との親密度尺度と自己成長尺度との関連性

女子大生における母親との親密度尺度と自己成長尺度の間には相関がみられず、仮説は支持されなかった。母親と親密でありお互いに依存している関係で、自己形成が未熟な女子大生もいれば、親密であってもしっかりと自己を形成していける女子大生もいるとい

える。西平(1990)は、青年は親との関係を完全に断ち切って精神的独立をするのではなく、親との絆を再び強めながら自己・アイデンティティの確立へ向かうと述べている。つまり、母親との関係が親密でありながらも、青年は自己を形成することが出来るといえる。そのため、母親との親密度と自己成長には関連がみられなかったと考えられる。また、自己成長尺度の項目内容をみても、自分が一人だと感じている人にとって自己成長尺度が低い結果になりそうな内容が多いように思われる。母親に依存していても依存していなくても、一人だと感じない限り自己成長は可能なのではないかと考えられる。

### 3. 今後の課題

今回、私たちが作成した「女子大生における母親との親密度尺度」の信頼性は認められたと言えるだろう。しかし、私たちが初めに「社会的依存」尺度として想定していた項目の多くがフロア効果や因子負荷量の低さから削除されてしまった。信田(1997)は、一卵性母娘の特徴の一つとして、母親がスポンサーであると述べているため、「社会的依存」尺度として用意した項目を残しておいた方が良かったかもしれない。

また、女子大生における母親との親密度尺度と自己成長尺度との関連はみられず、仮説は支持されなかった。私たちが作成した尺度がどのような事柄と関連しているのかは、さらに調査する必要があるだろう。

さらに、今回は母親との居住形態と親密度の関連を調べることが出来なかった。母親との親密度は、母親と別居している者よりも、同居している者の方が高いと考えられるため、今後これに関する調査も必要であると考えられる。

最後に、今回の調査は特定の大学に通う女子大生を対象に行ったものであった。しかし、一卵性母娘は、20代、30代の成人女性とその母親との間にもみられるものである。対象を女子大生だけでなく、20代~30代の女性に広げて調査することで、より信頼性の高い結果が得られると考えられる。

## VII. 引用文献

- 柏木恵子・高橋恵子(編) (2003) 心理学とジェンダー：学習と研究のために 有斐閣
- 西平直喜 (1990) 成人になること 東京大学出版会
- 西川隆蔵 (2003) 対人依存行動の研究—対人依存の自己制御と自己意識、ソーシャルスキル、及び対人適応感との関係の検討— 人間文化学部研究年報 5, pp.1-19.
- 信田さよ子 (1997) 一卵性母娘な関係 主婦の友社